

# 『物語』を語る

「語り部」とは、昔話を語る人だけではありません。先代から受け継いだ歴史、伝統、培った技術。新たに誕生した五つの分野の語り部たちが自信と誇りを持って、遠野の魅力を語ります。



右/各分野の講師から、認定証を交付された下/認定証交付式に集まった五つの分野の「語り部」の皆さん



## 新たな「語り部」が誕生

「遠野語り部1000人プロジェクト」は、『遠野物語』100周年を契機に、昔話だけでなく遠野の人々が受け継いでいるさまざまな知恵や技術に誇りを持ち、自信を持って後世へと語り継ごうという取り組みです。▽昔話▽食▽郷土芸能▽歴史▽生業の五つの分野で、計1000人の語り部の認定を目指しています。語り部の希望者は、昨年10月から開始した遠野テレビによる「語り部放送大学」と、その分野で活躍する市内在住の講師によるスクーリングを受講し、「昔話」であれば三話以上を語れるなど、認定を受けるためのいくつかの条件を習得。1月12日の認定委員会を経て、五つの分野と子ども語り部を含む計289人の新しい「語り部」が誕生しました。

1月17日、オープニングイベントに先立ち、あえりあ遠野交流ホール



新たに誕生した「語り部」に交付された木製の認定証。

で行われた認定証交付式には1期生となる「語り部」など120人が出席。それぞれの分野の講師から、今後名札としても使用する木製の認定証が交付されました。

## にぎわい創出に一役

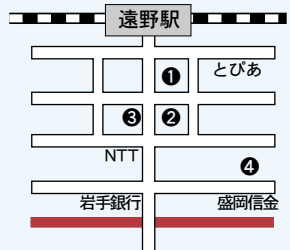
1月9日から26日にかけて、駅前通りを中心とするまちなかの四つの空き店舗に「語り部スポット」がオープンしました。市女性団体連絡会議、シルバー人材センター、遠野町地域婦人団体協議会がそれぞれ運営し、毎週土・日曜日と祝日を中心に3月19日まで開設します。

語り部1000人プロジェクトの認定を受けた五つの分野の「語り部」の皆さんが語りの披露、技の実演、自慢の逸品を販売するなど、訪れる多くの人をもてなします。無料休憩所としても利用できますので、買い物や観光の際にぜひお立ち寄りください。

## まちなかのスポットで「語り部」がおもてなし

まちなかの空き店舗を活用した4つの「語り部スポット」で、認定を受けた語り部が皆さんをもてなします。無料の休憩所としてもご利用できます。お買い物や観光の際は、ぜひお立ち寄りください。

- ①かたるべ案内所(駅前通り「ITO企画」隣)
- ②にぎやかギャラリー(駅前通り「くいしんぼ ちから」隣)
- ③かだるべ工房(駅前通り「アポロ化粧品」隣)
- ④やしろまえ(上一日市商店街「池端精米所」隣)



## 食は、まさに生きる源。先人の知恵を大事にしたい



「自分が子育てしていた時は忙しくてできなかったからね」と、学校から帰ってくる孫たちに手作りのおやつを用意する黒田さん。へちまこ団子にきりせんしょ、おからを使ったドーナツなど、レパートリーは豊富だ。愛情がこめられたおやつはどれも、三人の孫たちの大好物。普段は夫の豊治さん(64)とともに米や野菜、花きを生産する農家。「こういう不況の時期だからこそ、食材は無駄なく利用したいですね」と生産者と主婦の視点で語る。

▽旬の食材は味が濃く、そのままでもおいしい▽クキ(雑魚)は秋に干しておいて、ひつつみのだしに使う▽大根

は冬に寒ざらしにして切り干しにする。

「冷蔵庫が無かった時代は季節に合わせた調理や保存方法に工夫があった。便利になったことで忘れてしまっているだけ」と黒田さん。食の語り部の一人として、郷土料理の成り立ちから作り方を語ることで、多くの人に先人の知恵や工夫を思い出しもらえることを願っている。

「健康だけでなく、土との触れ合いや季節感、家族の団らんなど、食から得られるものには限りがありません。まさに、食は生きる源ですね。」

黒田さんが語る食の世界からは、つましくも豊かな暮らしが思い起こされる。

## 食の語り部

黒田テヨさん(60) = 新町 = くらだ・てよ



## みんなが自信と誇りを持ち遠野全体で盛り上げたい

2000年ほど前に附馬牛町の大出早池峰神楽から伝承したとされる「鱒沢神楽」。現在、13人いる継承者の長老が梶原儀治さんだ。

戦後間もない幼少時代。今のように各家庭にテレビなどの娯楽は無く、地域の人たちの楽しみといえば演芸会で披露される神楽だったという。

「あのころ、公演が始まる合図の寄せ太鼓の音に、わくわくしながら見に行っていたものだ」と昔を懐かしむ。その後一時衰退したが、梶原さんが40歳のころ、地域の人たちの手によって再興した。

少子高齢化、生活様式の変化などによる継承者不足の不安は今も続く。そんな中、



## 郷土芸能の語り部

梶原儀治さん(69) = 宮守町 = かじわら・よしじ

情報ビジネス学校の外国人教師の女性や、都会から移住してきた女性が参加するなど、早くから広く門戸を広げてきた。「昔のように、女性はだめだとは言ってられない。受け継がれてきた伝統を、自分たちの代で途切れさせないわけにはいかないから」と話す。

「この郷土芸能団体も『自分たちが一番だ』という自信と誇りを持って、遠野全体で盛り上げたい。そうすれば、次の時代にも必ず受け継がれていくもの」と期待を込める。

最近、由来や歴史を示す資料にもよく目を通している。「まずは自分が、自信を持って語れる語り部にならないとね」と気持ちを引き締める。